

Little Canvas



リトルキャンバス プロジェクト

～ 世界を貧困から救うために個人ができることを探して ～

恩田 瑞記

★第1回渡航★

期間：2007年5月30日（水）～ 7月03日（火）

行先：インド、バングラデシュ

目的：主にストリートチルドレンと言われる、生活状態の厳しい子供たちに、
絵を描いてもらう。代価として小額の現金を支払う

結果：画用紙に約100枚分集めることができた。

費用：約12万円（航空券7万・現地生活費5万）

★第2回～4回渡航★

2008年6月：エチオピア、ケニア、ウガンダ

2010年2月：メキシコ

2011年2月：ミャンマー、カンボジア

背景：

2003年2月～2004年3月まで約1年間、東南アジアを旅行しました。その中で最も印象に残った国は東ティモールでした。インドネシアから独立してまもないこの国では、国土が荒廃し、首都以外では電気・ガス・水道などのインフラはなく、学校・病院も機能せず、建物は破壊され、道路ももちろん舗装などされてなく、橋も落ちて交通も麻痺していました。まだ国連軍が治安維持のため駐屯し、日本の自衛隊も復興のために尽力していました。

観光資源もないこの国を1周してみようと考えました。もちろん地方都市には宿はなく、大雑把な地図しかないあてのない道程でした。しかしどんな小さな町であっても、旅行者がたたずんでいると声をかけてくれ、泊まる場所がないならと、ベッドを提供してくれました。のみならず、今さばいたばかりの鳥や、なけなしのお金で買って来てくれたお菓子までだしてくれたりしました。夜に灯すろうそくはまっさらな新品でした。貴重な一本なので、よほどの機会がない限り使うことのない1本だったのでしょう。

明らかに自分より貧しく、その日の生活にも困るような状態の人たちが外国人に、これだけの歓待をしてくれるということが嬉しくもあり苦しくもありました。はたして自分が日本に住んでいて、外国から来た、見知らぬ人を迎えるときに、これだけのことができるのか、と。

そしてこの国の子供たちは教育に飢えていました。学校がないこの国では教会でお祈りをするか歌を歌うくらいしか学ぶことがありません。子供たちにせがまれて日本語（カタカナ）の50音表を書いて渡すと、みんなで奪い合い、ナカタ・ホンダなど日本の知っている言葉や自分の名前を、腕や壁に書き大喜びしていました。国語の授業で日本の子供がこれほど生き生きと学ぶ時があるだろうか、と考えさせられました。

また娯楽のないこの国では、ぼろぼろになったボールで飽きることなくひたすらサッカーを続ける子供たちがいました。

以上のような経験から、本当に自分たち日本人は豊かで恵まれているということを再認識させられました。そして自分がこのような国の人たちのために何かできることはないかとずっと考えつづけていました。新しいサッカーボール1つを自分の手で届けることだけでも十分ではないか、こういった国の様子を書いて残し多くの人に知らせることができれば、もっと多くの人が世界のいろいろなことを自分で考えてくれるようになるはずだ、とも思いました。

スターバックスで働きながら、いろいろなことを話しあったり、青年海外協力隊員の報告会や各NGO団体の講演会に参加するうちによく思いついた個人でできるアイデアが、「リトルキャンバス」プロジェクトです。

詳細：

対象とする国は、主にアフリカ・アジアの豊かではない国や土地を考えています。その日食べるのも困っているような子供たちに、持参した画用紙とクレヨンを渡し、絵を描いてもらいます。テーマは自由。代価として日本円で100円相当を支払います。その絵を日本に持ち帰り同じ100円相当で売ります。ビジネスや儲けることは考えず、完全に100%のフェアトレードを目指します。

おそらく彼らの描く絵はへたくそで、ただの落書きに近いでしょう。しかし、募金やホワイトバンドという目に見えないお金の使われ方という貢献の仕方ではなく、私はこの子の描いた絵を買い、それで彼がその日飢えることなく食事ができたと思えることができたら、その絵に100円払ってもよいと考える人はいると思います。知人数人にこの話をしたところ、是非買わせてくださいと言ってくれた人が3人もいたので確信が持てました。

とりあえず1回目の旅行では100枚を目標に集めて帰国したいと考えました。現地からもリアルタイムで更新しながら「リトルキャンバス」という名のホームページ（ブログ）を立ち上げました。

URL：<http://www3.atword.jp/canvas/>

アートマーケットへの参加：

絵を持ち帰り、帰国したあとで、何回か報告会・路上販売を行ったりしました。興味を持って話を聞いてくれる人や、絵を見てくれる人はいるのですが、残念ながら絵は1枚も売れませんでした。

その理由としては、A4サイズよりも大きい画用紙は、買っても置き場に困るし、飾る場所もないとのこと。活動を応援はしたいが絵はいらぬという寂しい意見もいただきました。また、企業や飲食店などに、まとめて購入してもらい、飾ってもらった方が、より多くの人々の目に触れるのではないかの言葉もありました。

井の頭公園で2007年から、オリジナルアート作品を販売するアートマーケットという企画がスタートしました。多くのアーティストや、公園を訪れる人たちと交流しながら、絵を販売するよい機会だと思い登録しました。ただ、絵そのままでは本人の作品とは認められず許可がおりなかったため、これらの絵を元に、絵葉書、カレンダー、しおりなどを制作し販売することにしました。

2008年1月からの約3年間で、売上は6万円ほどになりました。

将来：

大切なことは、絵を描いた子と絵を買ってくれた人が目に見える形につながること。自分はその橋渡し役になります。

そのために、絵を描いてくれた子1人1人の写真を控え、名前や年齢、夢や希望などの情報もデジカメ等に残します。そしてそれを購入者に伝えます。もしもその絵や、絵をもとに作った絵葉書などがとてもよくて、2000円払いたいという人がいたら、やはりそれをそのままの金額で子供にもう一度届けたいと考えます。できれば購入者の英語のメッセージや写真なども一緒に添えて届けることができるとよりよいと思います。1つの絵を通じて、異なる国の人たちがつながっていくのが理想です。

プロジェクト名の「リトルキャンパス」も、たった1枚の小さな画用紙が大きな夢をかなえたり、将来を変えるきっかけになればと、名づけたものです。

さらに一歩進むと、その子に会いたいという人が現れるかもしれません。もちろん喜んでその国までお連れする手助けをします。2人で一緒に絵を描きあっている光景が目には浮かびます。もし絵心のある先生が、手伝ってくれるというなら、現地の青空の下で期間限定の子供絵画学校なども開校できたらと思っています。読み書きはできない子供でも絵は描けると思います。こう描いたらもっといい絵が描けるよと教えてくれる人が現れたらうれしいです。

何年後か、世界の多くの人たちがこのプロジェクトに共感して、真似して同じようなことをする人たちが増えどんどん広がり、一人でも多くの子供たちがその日の食べ物に困ることがないような世の中になっていけばいいなあという夢を描いています。

課題、問題点：

雨の日、夜などは、絵を描いてもらう活動を行うことができませんでした。また、インドでは日中も40度以上という暑さのため、屋外での活動は難しいものがありました。

全ての子供へ1枚、100円の支払いをすることができませんでした。ぐるぐるとただ適当に描いただけの落書きだったり、小さな文字だけだったりということもありました。活動中に、20人以上のひとだかりとなり、そのなかには雰囲気は怪しそうな人たちもいたりしたため、その場で財布からお金を取り出すという行為自体が怖く、絵だけもらって感謝してその場を去る、ということもありました。

名前・年齢くらいは聞くことができますのですが、言葉が通じないため、子供たちに将来の夢を聞くことができませんでした。絵に対する代金でお金を支払うという行為も理解されていたかは疑問です。金をめぐんでくれる都合のいい外国人が来ただけだと思われる可能性もあります。

路上でものごいをしている子供たちに、もう一度会いに来て売上を届けるという行為は難しいと感じています。売上はまた別の国の子供たちへ、というサイクルがいいのではと考えています。

活動の広がり：

アートマーケットで出店を続けていることでいろいろな出会いもありました。

子供と平和をテーマに絵を描かれている五島優さんは、自身の絵をボクに預けてくださり、その売上げの半額をリトルキャンパスの活動に寄付してくれることになりました。

夏実さんが開かれた「作り人の会」の縁でお知り合いになった、中村ゆりさんは、「最近売り上げ金の一部を還元して、買ってくれた方の善意を信じて、どこかに募金して下さい、とお願いするように始めました」とのことです。また、子どもたちの絵を元に、ストラップやキーホルダーなどを制作し、提供してくれました。

あるおじさまは、子どもの絵の原画を購入してくださり、子ども図書館に寄付されたそうです。いずれ展示会を開いてくれるかもしれないとのこと。楽しみです。

2010年11月には吉祥寺駅前献血ルーム「タキオン」で展示させていただきました。12月には国際交流ボーダレスフェスに参加しました。

こんなふうに、少しずつでも世界が平和な方向へ進んでいけばと願っています。